

2023年4月30日 主日礼拝

説教題「三度あることは…」ヨハネ福音書 21 章 15～19 節

主任牧師 加藤 誠

「食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、『ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか』と言われた」(ヨハネ21章15節)

14 節「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である」。主イエスは弟子たちのために「三度」復活されたご自身を現わされました。一番最初に主イエスはその復活の姿を弟子たちの前に現されたのは、十字架直後の日曜日の夕方のことでした。ユダヤ人を恐れて暗い部屋の中に閉じこもっていた弟子たちに「あなたがたに平和があるように」と語りかけ、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」と、聖霊の息吹を吹きかけられたのです。二度目はその一週間後の日曜日。一度目の復活の場面に居合わせる事が出来ず、「俺はこの目で、あの方の手に釘跡を見て、この指を釘跡に入れてみなければ、またこの手を脇腹に入れてみなければ、決して信じない」と言い張る、疑い深いトマスのために、主イエスは復活の姿を現されました。「あなたの目で、この手を見なさい。そして手をここに当て、わき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と主イエスはトマスに語りかけ、彼は主イエスに従い、その福音を伝える弟子として立てられたのでした。

そして三度目。今度は他の誰のためでもなく、ペトロのために主イエスは復活の命をあらわされます。すでに二度、復活の主イエスと出会いながらも、どうしても次の一步が踏み出せずにガリラヤに戻り、ウロウロしていたペトロに、改めて弟子としての召命を思い起させるために、主イエスは復活の命をあらわされたのです。

この時ペトロは、湖に飛び込んでずぶ濡れになった身体が、主イエスの用意してくださっていた焚火と食事によってあたためられ、静かな喜びと不思議な力に満たされていくのを感じていたことと思います。彼の心の中に、かつてこのガリラヤの湖のほとりで「わたしに従ってきなさい」と声をかけられ、すべてを捨てて主イエスに従い始めた時の光景がまざまざとよみがえってきて、主イエスと共に歩ませていただいた三年間への感謝がふつふつと湧き上がっていったことでしょう。

そうやって食卓を囲む弟子たちみんなの顔が自然にほころび始めたであろうその時、主イエスはペトロに向かってこう切り出されます。「ヨハネの子シモン、あなたはこの人たち以上にわたしを愛しているか」と。これはペトロが二度も復活の主イエスとまみえていながら、どうしてももう一步を踏み出せずにいた原因となっていた「あの夜」のことを問う「ド直球の鋭い問い」でした。しかも単に「あなたはわたしを愛しているか」ではなく、「あなたはこの人たち以上に…」と主イエスはペトロに尋ねられたのです。この言葉を聞いてペトロは、胸が張り裂けるほどに心臓の鼓動が高まるのを覚えたのではないのでしょうか。なぜなら彼はあの夜、「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしはけっしてつまずきません」(マタ

イ 26・33) と口にしてしまったのですから。「俺はみんなとは違う!」「俺の信仰と主イエスへの愛は、他の連中とは違う!」。自らの信仰と愛を誇り、口にしてしまった言葉が、今や槍のようにペトロの心を突き刺すものとして思い起されたことでしょうか。「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがよくご存知です」。とても主イエスの目を見てまっすぐには答えられない。下を向きながら、なんとかそう答えるほかないペトロの姿が浮かんでくるようです。

そのペトロに向かって主イエスはさらに二回「わたしを愛するか」と問いを重ねられます。それは、あの夜ペトロが「三度イエスのことを否んだ」ことを思い起させる問いかけでした。三度同じ問いを向けられて、ペトロはさらに悲しみにあふれながら、「主よ、あなたは何もかもご存知です」と答えざるを得ませんでした。

「ペトロの三度の否み」と「主イエスの三度の問いかけ」。この「三度」は何を意味しているのでしょうか。「二度あることは三度ある」「三度目の正直」と言われるように、「三度目」というのは勝負の分かれ目です。踏みとどまらなければならないのです。しかしペトロは失敗しました。「三度あることはこれからも繰り返される」。ペトロは、自身の力では四度目を止められないことを自ら証明してしまったのです。ペトロには、主イエスを愛する資格はないし、弟子として失格の烙印を押されても仕方がないことが白日の下にさらされてしまったのです。

しかし、このあとペトロは知ることになります。主イエスが「この人たち以上に」と問われた真意は、「あなたは、この人たち以上に赦されている自分を知っているか」という意味であったことを。

そうなのです。主イエスが「三度」の問いをもってペトロに確認しようとされたのは、ペトロの愛の深さではなく、主イエスの愛の深さでありました。そしてペトロは、彼自身の信仰と愛の強さによって立っているのではなく、主イエスの深い赦しと祈りの中に立てられていることを改めて示されたのです。

クリスチャンとは、主イエスを愛する以前に、自分が主イエスに赦されていることを知っている者です。主イエスの赦しと祈りなしには、何もできないことを知っている者です。ペトロはこの「三度目の復活」において、その一番大切なことを、主イエスから改めて教えていただいたのです。

私たちがまた主イエスの前に立つとき、自分の調子のよさ、それでいていざという時に主イエスに背を向けてしまう自らの弱さ、狡さ、未熟さを抱えている者です。主イエスから「あなたはわたしを愛しているか」と三度問われたら、私たちがまた「主よ、あなたは何もかもご存知です。わたしが自分の力ではいかんともしがたい弱さと狡さと未熟さを抱えている者であることをあなたはご存知です」と答えざるを得ないのではないのでしょうか。しかし、その私たちを、主イエスは大切な神の国の働きに、神の国の喜びと慰めと希望を人々に伝える働きに招かれます。「自分自身の信仰と愛の強さを誇る者ではなく、弱さを知る者としてこそ、わたしに従ってきなさい」と。この主イエスの赦しと祈りの招きに応えていきたいのです。